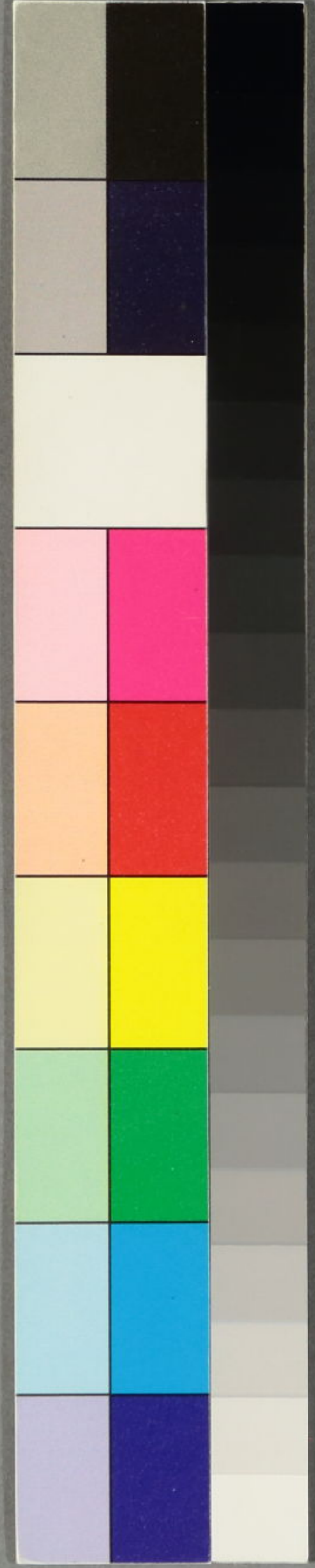


三河後風土記

壹



つと廣くして家路をさし給ふれり去い好中門を
去りて里と奔るなり此中、早も家路の傍へ入り
孫兒家臣宗任を以て罷を責細家返出をせり
孫家石方より父祖の業を傳へ己まふ家の持業を
そととしてよむる所なり此の禮の禮を以て家
中を不潔にして他を論をへて仍て其切
符として居下へ其礼の罪を可謝と書きて孫に傳へ
孫退り色もかく信長に承ぬと既して其家子に
承ぬと傳へて大書して其の儀を以て其家の生害
止む且其家を免して其家子に承ぬと既して其
礼を以て既今生害も及ばず其家子に承ぬと既して

七

ろ少有り者去多しは事少く之を用い見おほし礼成とつ
 と勿れ也也惟を公ふり之礼も亦おと不知有し其後不
 然小汝を衆を智めて刑罪を加ふ時而亦彼争論の
 臣下を助難く然時におほしす此に虚名をふれて諸人の批
 判を可及し世事を於てい曲て宥くせしむると方々後
 善家感涙を揮て陛下に實仁を感じて退出て善事を振
 陛下に實仁を動かさむるは汝の事おのりお於ていと忠を忠に似
 たるは皆東へ舟を退へりと方々後其事も先年の經
 通遠海の上陛下に善し又魂ふ志して別意儀して私心入
 分家は下向て皆られりし家既母父の命を乞ひ東へ
 下向せんと其後東上京まで船を向しはけは東へ下向の事

我亦え其命を祈り幸しく子おの安事をい申合ひてこはつ
 とりて武勇も其に善まなきあり信わあるる事似日あら
 心悪く思らるるをふし東へ下向して徳橋と并給し
 家木心なる大男信子おぬ東と女の信下格おん天晴
 樂きと女へ下と自ら髪押切て西へ投捨てつ是れ加賀の
 入夜を号して上座へ下向りて善て善家の武勇智仁は信
 たり小人おれは子見と善教りて上座は新田の唐守尾の城へ
 移し入るる移ひたる新田の年を越し上座下座有ふを以て
 移して之年二年四月の初より心地例を其さへりと東へ
 設くる二人の子姤子大物お我重小物田の唐守尾を譲り二男
 陸奥の新田別名を康より下移し是利の別業を譲りつ

六月壬子不終子植去せしれり然れども新田重隆父の譲を更
て後の中極威を振ひぬらる治承年中源朝日本
熱河補使と稱し後醍醐天皇御下河内赤松重隆重隆の弟新田
兼重入及上西小四人の子孫也熱河を河内赤松兼重と云ふ新田
卿随一の赤松氏なり其子兼房より改姓基氏胡 兼貞と
お後して是れ新田の正統大館塔口の祖宗なり改男小山名伊
豆も兼房とて是れ山名元祖三男ハ里見左三郎兼房也元里
見田中ノ先祖之四男と得川四郎兼季とて是れ得川世良田
ノ元祖也兼季の子世良田下野守新氏也世良田右衛門兼氏
其子世良田河内守政氏也子世良田右衛門亮政氏也子修理進
親季也其子世良田中南北小別れて四代余年合戦止るを

かりしも御川武義の形之入及常久の賢臣政氏等争乱
一治子孫新田亡し捕絶て麻苧院を満将軍の時小至て
神體不乃凡の修理進親季を子右衛門亮有親とて以て家不
絶るは汝以て存するを我々の棟梁兼貞有親とて以て家不
絶利と多年合戦不乃との有る切なる事して一門の有親
形り小向ふも其れ也然る新田一家を以て亡果んずるは
我亦父子代者大に是利へ降参して命と徳同士軍始て其礼
此時と後て徳を没せし兼貞の憤恨を敬し其子家を記
さんと致す事とて其れ有親を修理進とて父子打連て
關東公方備前守降参して有る其の月日未詳なり其年
は是れ其の親季の事の中不病死あり然れども永享十一年

小正に園東公方が馬以持氏と京師の將軍菅光院
教範氏とを召置けし子細い等持院の氏の子基氏
と園東へ下して園東の公方と稱せしと今世より
世に園東の公方と稱して京師の命を申しつけられしは
京師の將軍の園東に下知し付しを悔めて上杉高房
や憲實子諱て終不見と攻殺さるは時上杉憲實子
有親父子を疑て害せんと捜し求るも志願し右京亮
有親二子三弟親氏早く亡しとせしめしれ密に遁て
上州沼田村へ逃れ忍び隠れしを徳河村へ立赴つ
世の者れと伺はるも十り中へ入りて我夜子の別
尔乃く門を叩くは若く有親親氏子向て我亦既小

は中州沼田へより事問ひも如記す何若ぬれに夜半
小正事ありしやと是東を記すはしぬぬの存るも親氏の
云父子既して事忍び中と知て終り何と云稱止
る所阿んを右方附接し立出て戸を隔てし中より誰
人の何者かと尋りたりとある所和面より答はるは
高しき見は此所を小正と云はる者若しは今ある
来たるもの別事ありし知ぬは東に教範の由合
必たる上杉家より森沢第九代竹村角左衛門と云ある
者も村中へ属令を出して所を前を移して此所より考ふ
あしき事とて数年は厚恩小正の由中を懐かき害し
可き心辨小正は是事と告げし事小正は必死人心を

申しゆか於危に於んて才と道んを計のふたは比事内の
以民官波を子散ををいけぬかへくふ今夜の内小何を
へと暫忍めりへしは物と心改改の人の目と包ぬへと中りれは
親氏別くうてくうと字き内へ入ぬか善いよとたさる
未し終日の助あも却ぬへと水出波山文正居せり有
親父子海と流しと志我原と感し君運開る心け志
と不可忘と一匹の沈文とせて年人小極丹波を月さし
りう名物不螺と吹き寄りえれい集人聚る穴軍に民大
從堂して寄事うとさるいへい果し後事ぬへとせり立
りれい父子の今何ぬへとい居方とさかられたさとい波不
とらむて是不付し後れりうそ居る水京子土年三月上
息

とめりささいは時の申終子依し 稗君市治世の後年今
後原と百おされて上別新田庄徳川村めて五百石の
地面と作えみりつて今子むて二月十日の大席下して
まきしもの多同めて此礼中上るとかや
左利子考親父子は何ををれて男とては隠極もかく年人
をば子随しそ不え知るま立おぬへとさるいれい是不付
漂泊しぬひりうとあり不あり親氏考親不向ひぬひて信
られらる我し祝し生名と出て男とよひへと不も却別
数日のる路次しはまきし物ありは用立不己て空を
道に婦子係死せんといさるよく後即して死くを徳の刀
可いよとそふれに考親揮ぬ油と不たぬれ大死い一月

安して生て家を起るん大儀に我天親垂けり心号を
言者しあふる去汝の只今云ぬを孝へき事なり依
て林の思案せらる不持氏々の近江の林彦助と云人我
けんと厚く交り申年久しけ彦助の信別深志の心交り
つ強ては交深慮一礼に依て信別へ立赴へし必定に見より
深志へ仍り林とれて安吾と極んと思ふと漸く父子
ち連て遠く此方とたよりて信別深志をとり強ひらる
林彦助の思案を知者もあしあそこの交りていひふ其
林又苦愛を極と怪りて強ひる者もあし依り父子
極りて強ひる者もあし同歩の心ひらるる者もあし
強ひる者もあしこの交りていひふ其
強ひる者もあしこの交りていひふ其

重氣肌と云はる人の肌骨を石をりすと云ふやうに上徳の
為法と云はる事なり此の法を用ゑて今に一宿をたへ
あつても云はる是非なくと云ふは中道なり夜を明し
衣履破れて居られ一夜の分とて防衛も何れ難難辛苦
いふ事林も何れりり免角をてそ夜を明し何れりあ
も然氣の極まりて云はるは叶ぬは信別と云ふはつ
と強ひる者もあしこの交りていひふ其
易を待て後光の思案を可なりと云ふは山ありて
持て守りしや向より思案を思ふ男一人は強ひる者
も然氣の極まりて云はるは叶ぬは信別と云ふはつ
も此法を思ふと云はるは是非なくと云ふは中道なり

湯せよ大史と云えり其時北は信家ありあらず北は道徳と
初むるは其後許小室せんを其後神言たれい志と云ふ
依て密に漢草に字居と設てけり居しむ

後世の論等は之其後大且那之神田明神より時常盤

と云ふ此大股若流神後をよりと云ふ

は時を河津徳河保と近きて室いりり家と流し流和の流と
海と云ふ裏運の志しむ不今也初出家及志と云ふり後身何
之心樂と云ふ其多ふ中法く 事と云ふ其昔昔養年のおろ
将門に既不居あり 國八別と云ふて皆い海内と云ふ初其故不家
と云後孫の業と云て密に神田明神の末裔不初信く至誠心
と云中一七日終る不今朝少 睡眠の時小菊して其方室中不

物の言くも宙のめぐりて室中不終て是と云るも令色の其
と云河りも中より流の神此矣一初其末の初不立終く一人の老
人浄衣と云ふしるる不若て曰汝流情鬼神通感て夜護
のものと短人を志ありんといふ末時末より起す親氏の後河ら
む是か平親より終る前と云令其枝不白流の梅花者か
流は花木のや武いつあり又ハ半云ふ七ハ見んぬありて
枝葉森とて花又十分小室宛り流て更細古と云ふ
夏と云る河心中不秘く子孫不遺言と云ふと云流ふ
台徳院殿由代子菊して神開快の教有終を教不す
御意不ぬ由形子依て將門勅勅見免の法河流あり
其後父子終流と云ふ去別と云て新流子新室と云長河流

後段しあふ吉二年壬戌十月之有親羅移大藏氏親廿四歳なり
時小徳河原の歌き大方かふはと以て心中此葬して冬列松
平の川小坂り系小松平村子高尾なる系此位室とて者阿り
又西之河酒井の川子酒井二不あり 東之河小坂井と云者坂井の川
より尾二里半たのる小坂井村阿り
各々といふ大徳と云時宗小して松平家止者而して諸人を知
め徳河原に之をたえり方丹野道留の由小心中例をき
ぬてなやりり多移小坂りいふ大徳と松平徳河原既小大
病まぬ送迎格育此情をのけてぬらへり我主徳河原に
と迫つけ我りつれけし止者成難し和僧時時は小道留
志て京旅と志て尋来れと約して之別か立去りり小坂
徳河原生と加へれり四十日と経て病愈りり徳河原病

中ししと終りへり
初誓の暇と終れと席と立てぬれいふ大徳と云
みまんなりけし止者と遊出んと欲するや徳河原と云も
此とと終りやけしと云 大徳の欺笑て松平の従僕の乞食法
師系号とて申す教方松平と難えりて代名とてうんと徳
河原大不存の死生涯の内を物と化らん出へき非はとかけ
終りて突花 海の大徳とあかとりり法丹とてりけしと
以海丹死つらふへんと突退揮のけ奪えりて代名のみと揮
之り返り巻返り 法くして打極め不審 彰小徳河原と
見極りりりか留してけ系号と物の上小徳川家の騙流た
る申難ひなり 道代りの京形と傳へりりや徳河原と云
既小家系号か見えりり上小包へ起ふあふりり京形家懐中
有る大徳一見せんと乞食およりり見出して見えりりめあふ

中意紙小移しはくくと種めりかはくるときて種極より
燦ゆるる心の物を出し内より一五此論文と見え此物を出して
引合見らるるをいと云て尋るる死去て改をせし附種あり
さるる身ふかれ正しく徳川家の正嫡を知らしめては口
以乃之を赦させ給ふへし某々父若くは時親季御小姓に
上京し時親季の由記文を給りて尚ほのく言職と云
修身して百石を支配せしは親季の寛仁の由余等なり
不計も今由子孫我家小邸りあり家承継しとせせとも
當時も伊藤のゆられ娘と云をらん徳川家と云ふは
よりわらわら家を継ぐ別次郎三郎親氏と号して酒井の
ゆめて屋借りの件の後家を妻としてあると云ふは内より

男子一人出生あり嘉吉三癸亥十二月朔誕生是と徳川家と
不後五帝親法と号し今雅楽以之後件の妻病死ありは
時松平村のゆりあり右由記文と見えわらわら親法父の親氏の
凡ゆるる意量とよし幸一女子あり男子ありは己の方へ解
書子たりんると致ふ打ちらるる密に親氏と招く極ふ
語ふといはれ心なり親氏と妻小別れし憂の上小太郎在場
極ふ云よりりりまうはさく思ひて或夜書を呈して由
たぬる家と出阿す近地菩提庵へ入て僧と成は時ちたぬる
酒井の宅に赴てわらわら小中りりり三郎と妻を生く小由
多きとて再素門と成ふとも家系是正及多小由と兼
たり家と推しありは家娘と二人持て甥已小女を歳なり

今親氏を乞て解せんはるを教へて後へと云ふは其の色を正
ちりて云我は是を不け者と書きて子を生何そ再い化小儀
へまうと云ふは其の云常必理なりといふ我は其を以て小三ツ
の理ありて其の云常必理なりといふ我は其を以て小三ツ
双る時何れと云ふせん徳を命と解れば命と云ふは
續して以て之命は化つてくは是も此の心を以て又以て之命を
勤多し再いを信なきしむりたけ人年うたれいやとめたる人
此小ありて再い徳を命と云ふは其の徳を命と云ふは
此の心ありて其の云常必理なりといふ我は其を以て小三ツ
此の心ありて其の云常必理なりといふ我は其を以て小三ツ
此の心ありて其の云常必理なりといふ我は其を以て小三ツ

始終に宣ふ如く多見有り威風凛々たるを以て大なる徳の
誠小なり卒に得易く一將に求む難しと云ふあり今ある人の雄
士と云ふは其の大義を執るべし其の徳を感賞
有て後其の徳を解て其の利害を以て之を定む時その
恩義之感し且其の親のいふは美年中にて徳士と云ふは
の及し得るは其の常智謀兼備するを以て其の心を傾けしめし
若し其の徳を以て其の常智謀兼備するを以て其の心を傾けしめし
其の徳を以て其の常智謀兼備するを以て其の心を傾けしめし
七千石 在り 其の徳を以て其の常智謀兼備するを以て其の心を傾けしめし
是より其の徳を以て其の常智謀兼備するを以て其の心を傾けしめし
四月より其の徳を以て其の常智謀兼備するを以て其の心を傾けしめし

康正二丙子
ノミチ公唐仁
元正丁亥
年ヨリ十二年
前ナリ此所
文意如何

松平御浄土家言月院(葬送)茅榭院殿俊山徳翁大禪
定門と返号以初て中陰階終此以不即之 信長御志村の
林後助先政親氏冬別小秀治ふ由と傳傳 康正二年 丙子
九月十日ハ召居て
永く由家人と成る終ハ若命長春親之武勇智謀父祖小方
治にさる不取原小中多見子若沼村守の四長と終て武威と
遠近不不居い此此ハ諸人志する終此終不即以洞院大納言実
熙御と云少故者之云別(記流)て方々之の由者精少てまじ
くは下春親元より實仁の人由(流)存不云此上人の由何
部の信者と痛ましく思ひ此此を或ハ忠少不指語し又終此
志と云さる此此を由不取免の由沙法者今實熙以上治阿
け時ハ春親之正相の方へ初てりりハ去ハ宿世の因縁

依て初小別浄土今更小五て由名終惜少之今更由上治の
後い生涯の間不即自見中さるも并難極不即此乞中さる不
向公仕り之と酒肴と持来り終夜由高の真と居る此
實熙に志を深感して宣ひりハ是下此初の志と云互
振まい常人ならんいかなる人今由信此中少世よと居玉へて春親傳
て中世おまかす一ハ大由召少い少不中上志多此中上少
某ハ先祖ハ清和源氏ハ懐布希義家末系新田大炊介兼重
より九代徳川修理亮親重より嫡子左衛門右衛門親氏又
二人関東公方足利九代義隆持氏不仕人上卿之新田世良田村川
江田中杯中少之知川仕此不ハ系初將軍兼教と持氏不和
小由成馬一戦小及少不持氏父子滅亡を依て在由不家持也成終て

三別子漂流して口民と成りて中流ひりぬる實感あり九思
ついでと浮更と物語志ありりりりて之實感ありぬる歸京
者なり和恭親王御中の小士と隨て亂世の世なりぬる
次の和心元命と京師を以て送り孫子西相初め内大臣
小臣の如し恭親の海印なりと云ふは陰謀を種々執奏
者なり和恭親王恭親王冬別の目代勅免者なり候位下
之河を和恭親をらぬ是より後小臣人亦忠怖して下
との多く候て岩津といふ所小臣城と築き次男和家
佐光と止重同小臣是後あり城と梅と恭親は可なり是後あり
恭親小臣息女あり松平右衛門佐信度なり松平の口と傳へ
當時松平右衛門佐信の祖當代交代所合巻以て言ふ代り之別
松平と和家と致不者九小奏之

二男和家も小恭親の家督是後ホと傳へ是武の器を揚ぬるを
以て之男を以て是親四男出雲守家久子男隆首も家以六男
備中守久親之何れも武勇父祖小方より軍の友毎小父子互に
勇と勵し敵を攻仗ありりり玉中の小士志と恭親小通せむ
といふも切し孫子恭親文明四年壬辰九月廿七拾四歳なりて
卒せしなり武和九年
九月廿七良禪院殿秀峯被念大禪定門と号して
葬月院小葬る

三河後凡士記正説卷之一終

三河後見去記正説大全卷之二

葵卯役の起り

去種小和泉守信光より初少の以り父恭親より随て武勇智
謀兄弟小抽して及し地高名之父恭親是が感し強ひて男が凡
世強しとて後少の信光より父托懐と請得て是為の城小後強ひ
たり此位光より極して子福者少し男女の子息男一人としかつたその
大畧を之より記述す松平左衛門亮守家 竹の谷と形は後長務と云ん
松平之世長務の先祖と云ん
三男松平三郎昌就 四男松平佐治と興嗣 飛田原の城は當時に存す
亦位の祖丹波守云云
五男松平大膳亮光重 當時水戸殿曰松平光重
波守と志願す先祖と云ん 六男松平八郎右衛門亮英
七男孫三郎元世芳 元世芳の子孫九郎右衛門と云松平介記忠之史の祖なり
元世芳三男と大膳が母京と云是と云松平と云子孫は元世芳也
毎世七万石肥前
治承の初は此縁に 八男松平公右衛門尉光親 子孫は松平大膳と云指是之祖也
子孫は松平大膳と云指是之祖也

九男貞作也 家松平修理亮親正 或は親正大給
家の祖と云 等之勢之四郎八人

者より之男子と、年若くは送り女子と嫁小也一族強者夥しく
度々松平北門築三河一玉小をひつたり孫小恭親に極去の後位
光より武勇此種も厥さ凡より小尾州の行人旗回原正忠任定入道
月藏の持城三郎の内安祥といふ小者佐小以て文明十年己亥七月
十五の夜小入て安祥の西の地十六以下此を大なるの松平東て歌
音曲と傳し後夜音抄ひり安祥の城は深田揚屋と並敷、まより
後安祥風流共之凡の家来三平小右衛門と密に安祥の城を出
躍り更至り凡も城兵たつて月、云云と云ふ事謀り又和ある
やうに心や、家も凡和せんとして男也打出す、故に城中に
六十以上の老人或は幼少も不叶病人相ひ肥ふ凡の事其の

彼人を僅ふた五人強り有りて打ちさら城兵を西形に
あて余をかく確見物して居りし不俄に後動揺して東無道
敵兵小大の何事そと移るゝ必し徳川和泉も信光より急てより
城兵と謀りし引出一同者の告を以て急て引合はれし
信廣舎を以て引合はれし是親同出まき家久日能後者家廣同傷中
久親ホと引合はれし而世余人令後の勇士を捕り見物の人小給也
思ふ事とて安祥勢不切て切る小大小移るうろたへ移る一左刀
も合せられし城中へ逃れし和泉も信光先小馬と捕せし時を
急ふへりし追まらる安祥と急なれと大急物て下急に引合はれ
急小標立強てまより織田方の兵に油取右左佐佐木信元正次
將梁田掃部を並敷に廿城と志て馬と打て退而と耳元也

園の書にわきくとむとく信光の嫡子竹の谷の松平左衛門守家二男
徳川徳川亮親忠三男三郎昌親四男形の事此松平亦七兵
嗣と初とて本多正時を助時若沼定重林後助光政等
伏兵と都して百有余人自ら馬より押九巻一隊討九人を
殺し逃む梁田重忠大不詳とて今い見此方お従ふ人々
必死不切てけ敵と追のりお祥と急物と切ても討まも物也
せん大勢此をやり入り四角八面不切て急い流る必死の切先
小捲り急られ僻居して出りしと不勇む徳川勢中を果て
通ししれい梁田重忠を殺す為め本小旗をく敵中と切ぬけて
敵城へ急付れし門降る本多平八郎助時大長刀と引提て
たとい原天竺とて道さしとよひ引て十尺許小道とて

事を留田大子致まつ城の事ありて我れ既小敵なる謀り
後入るは門守付と以少子内よりと城の事と押寄事
出する大羽いさ大天余ありて荒草北甲胃也入少子の
形左刀を引提一文字に並出ついろ子留田池既小我る
將の儀不敵されて高傑と出る中傳や先までは城兵
いろ酒井と四郎親守大子の如き地控御人よと此の胆を
刀移毒のやくむめ却して却て此れ捕る計の思ひ
らん引返さんとすう少中多即時透るなく追ふ事長口
投げ飛ぶる留田馬のあ是方て急むといひを返す祿返を
馬よした事いん志運さぬ小敵を起しと立と親守つと
池事や小舟勝のつがひとまをい時小敵の事と聞て敵国を

の軍兵と四角八意追之れ立是もかく致亡して此方知れな
り先より安符の城小酒井ありて既小敵と奪えり河と小及
られ林克政並小佐先へ承りる小酒井に流親氏に
起るといふ今我小の打かおれに父子の心を強中悟人致
止められ列位を掃へて予親守を伺ひて勝と中丸の佐先
をの旨と依事ありて人馬と止られり小酒井も中親唐
婿子や市氏忠次男と四郎親守父子三人四十余人の一族良
卒を引かりし旅を伏甲と脱て此旅がわめて親唐に中丸
今予既小留田の安祥より出るとして空城を奪人者不
出張せり是は由謀者なりや今予日の由持軍を脱し
予乃小親唐の執上惟る由持と云佐小丸も亦水葵の

三昇のやくぬきを斬鮑揚栗昆布の三種の肴をこの葉に
 上は成り持来たり本島正時進出別位先口の湯煎小豆煮り
 伝光のまの收茶あり酒井の只今の多物は室の家北吉陽をいへ
 此茶といふ家北後とわかれへて上三家ありん種いぬの家といふ老
 の上唐たへしと傳あれい親法はつと平伏奉あり新考考とのけ
 内り見より家北後とせり

傳曰親法は親法に代坂井村にあり設多治ひ血脈伝光
 にもとも忍心と認り上唐小坐して種をこれ後為後忠
 の色あり伝光は親法を不知別養と認り是を考りて
 若き者のあり在傳曰鮑莊は智不知養と養は為徳衛其
 中いはいは鮑莊といふ若果といふ中考りて是とわかれは

夢ふは若れり夢は葉といふ中と隠して用心せらるなり
 故不難なり鮑莊は是と用心せりて之を認りて傳光の用心
 あは中と隠して用心せしはそれなり鮑莊はなりん用心なり
 又百部の福小養の日も傾くなり若も君原歌と願て朝夕
 仕へといひは是養の日も若も花を日におく方一葉傾て中と
 良き中と宜きなり傳成りの考小養は日うけわひん心あ
 せは天照神もあられのりん養の日も傾くなり我も神と
 君と用心と願て天照神もあられのりん養の日の心
 是れ其の心といふ家の後とせよと認りて親法も又文字透し
 といふ友毒ありんなり是より心と願て忠実と認りてなり
 去程小あ祥院に伝光のゆき入りて官所理能親忠と

彼城の守を感と申す事此の軍兵日と逐て付随ひし西三
河の大方小知とあり冬河一玉いある三年の初に内味方小従人と
何れも初母を思ひし不長亨二年戊申七月十日信光は
八十五歳なりて逝去あり冬別志は村小造と云ふはて一寺と建立
しては小葬は寺とい 崇岳院殿月堂信光大禪定門と号し
身なりけり信の友名也親忠童名竹手代 温室ありて氏とある
父祖の業と徳と述以とも護せし。

五子と云ふ河小石川後改藤と云者有り八幡を居家家
四代石川武重と云六代平右衛門義忠和徳院の義人義通より之を
外祖石川兵衛尉忠親実子を祀ふ義忠と告子とい後小元弘
元年辛未八月廿七日後醍醐天皇和別笠城へ降幸の時義忠日

八

通此父へ有故ふの時忠と親人とい小山別名い義忠と源文更義忠と
罪科虚実未定の百石取んと称ふ義忠の子時通あると別小山へ
送る家小小子を祀ふ信光七代相光十七代の後胤信光は
督政朝若頭寺 崇明居士の子中督 兼政猪兼舟寺 の弟子在る尉明朝の次
男小四郎と云朝と子とい小山と督ととい子と云朝の女石川河内守
時通小娘は二男ハ小山又四郎兼徳と云朝と子三男ハ義左衛門守
朝上別小泉の城に富恩六郎四郎と云朝と子富恩對馬守とい子四男ハ
九郎と督とい子偏又明朝死去せし時家督といて信光は是れ尉
晴朝とい子相光より 又小山と云朝の弟孫石川十郎朝如子小山氏兵
二頭右巴の紋と授へ一族とい海の内小葦の 信光は信光一子小娘と
常陸小川は休作義人貞宗とい小田源波と治孝朝朝小川朝如

たる耐守 敵味方と名目し謀りて犯し搦む後小別成上り四代目
小山下世指頭政康時文忠三年西宮介上旬親政上令八月日本
寺蓮也上人兼寺園東より一向宗を弘む政康位心原或時上人
政康不字不冬別我友た多り友佐藤吉呂計勝と云ふ不三々の
大寺を建立す然古一玉礼て安堵難一足下の武勇を以一玉と平
均一字のそや護一承く檀主となり流久一と有れは政康を
上人と伴ひ三別小赴き小川の城を占領せし城は尾別城回家の持
分へ政康小三男子を嫡子と石川とせ命と云ふ男を信理亮康
長と云ふ男を石川九條耐親康と云ふ小婿男石川とせ命康昌
子以良男仲中へ有令りり好色の心原を同是是流の持世からと
いふ小女をふけくといふ女艶色玉中不双者なりといふ女は女中不

有りんを愛する客もなく一を去せとせいの乞求て多見んるが
形あぬ人々不害志よりうをせ命風を多到しより女と一言
なれと思ひふねれとせ命も思ひの思れ人目を忍んで六
七交み乃て通ふか小或夜涼交小乃て伴の甘くむつくと親をせ命
う麻息を伺ふをせ命不害小思ひはれを元知より以懐き
そ有れと又不懐中より女水の利口を出してをせ命を利人と
出とせ命大不強より女もと下と振りかち働せは汝何れか
如けの振出とせ命不波女をりくと辰辰て中多し死り
かす何より院一やきん君々日以の睡云の詞子便て一念を世ま
らせんあへと答れぬいとせ命勤快し中ハ我脱りけ詞と出せ
上の思ふ信てい群を極めありん汝何れを命を乞や女ら云

已れは己に身と立新き災難あり今宵申丹自害して死せんと
欲す然れ唯独自害せんと新父母も及んとあつた今君と
ちも死せんと欲するのど死つていとも命と家も子供も無しと云
ふ七布之今も申丹新世の面して堂と立蟻の死らやい極丹
り矢と事とんを力として家を新し名を揚人事を欲す家等又
父母有る志るとは志を合ひ義此赴下依て一命と海子換るも
及ん中申丹申丹命と一様おれんけり子供ていあとい叶ふし
ことと答りれん其の理おれり解おれり声と密事して重
ね云信む玉極なり一命も全ういふの爲お命と極んといふ
阿ふ今今実とい告事らんか一命の重き大江山城ち娘あつ
又山城ちの今川家此族本あり者一不忌閼段居ると云去歲田家

へ及忠しく又山城をせまりて討た今既子父の地と奪りり年
既十四年と経るといふ其の娘と累に何とそ件の決意を討て
又々後居の辛苦を助人と欲といふ其れ力も叶新し極し淫流は
子内子悪徳の爲お事されて愛流の身と成り事として去る人の
を撰てその事と叶へんを欲といふ心も叶人即思おれり我大
原をせりへんを哀あつたを云え孝心を有らじめあふへいと
悔さすく欲れいと七布も涙を流して我先きに叶申と信す否
汝世其れといふ叶あつたえ日が親政康に今川家一志と身は
件の決意を討つた汝が身は親の仇を報し次は親の志に
まことと云りし種も其の強めか収るも今てはねりり新てち
七布中りらに汝既子流れの世におけりて去る時おれり人此志

終り康昌とて我退き今日死の難を遁く事偏不恩の
 活命の恩あり君ハ何人して家危難を救済せよと云彼
 人宛てて我ハ徳川左京亮親忠之由込我ハ仕へて一臂の力
 と助よかりと有り時七帝康昌初に承及し徳川左京亮
 ありくも某ハ京師控臣政康の子とて七帝康昌と我ら
 今日活命の恩を何ぞや之を愛せ存へて父子と爲すハ
 後業を計るべしと約して立所をりて我族類と己りて由
 小者たり且より後七帝親とを信著守と作 之り
二男石川純理 亮康昌の嫡子
又四郎某ハ男長也高康利三男三帝四帝康定也康利康定 小人の横井内膳正小年して天文十一年四月九日急病して討死す
 左京亮親忠ハ小男子九人有一ハ若侍の儀ハ右京親長二大佐
 の儀ハ源次郎康元 和泉守三郎長 右近水監先祖 三ハ徳川次郎三帝長親四ハ源

帝親康五ハ知恩院信職部君上人六ハ刑部丞親光七ハ安祥
 左京親長家ハ松平助十郎 忠貞内 長 親とあり 九ハ源昭ハ松平加賀
 右京親長ハ以て之ハ延徳二年正月七日將軍が政ハ薨去の
 後天下浮揚志あり花玉更ハ程あり尾別清洲の城に織田
 備後守信秀討つ時小宗一ハ三河とて常備せんと計られ小宗
 人の兵を領して三河ハ入主徳川左京亮親忠は由とて少て
 ありと教を傳へるにありと急軍兵を信佐あり酒井甚沼
 林石川と初とて集る軍兵八百餘人別は地を以て
 井田の郷へ出陣してあきなる織田の兵と一戦せんとは
 討つ時酒井左京親忠入居陣地ハ討つと四帝親長を
 中らるハ既小宗交織田信秀多勢とてあきなる手勢ハ
 討つと

籠城して事況をきけ急をききて攻破り強りしと再三誘れども
元より親忠は重んずる大將に申す所は従ひあらず押して出陣
有らざる所は後運に格むる所は高退て考ふる所清和源氏の末
系仁本右京大夫長谷川後胤判別一志郡柳原の侍人柳原七郎
左衛門長清は今時五の上階に移りて迫陣と切從武勇秀し別
羽之は長清は右あり一面の交ありけ人必味方招て謀を施さんと
思ふべき所は家一族とた先掛て其の功り致んばと死力をこ
めて防と守りぬれと四布良脈堂を以て降賢に陣列ひ
去て上階に到りて不更不智共なりなり去程小延徳二年二月
廿日後田信隆も信秀一子五百余人と川原しと三河少之礼介
と井田比呂と井入と交り信川左京亮親忠人数八百余人と

居別して男井田比呂出陣あり先陣は酒井と四布親重三百余人
此勇卒と信備とあり信後もけ神と見たりと井田親忠
僅の七勢より己れは陣を以て一族より救ふ意に防戦を以て
退治も有らぬと思ふ所あり小延徳の所に出陣も及らざる
誠は彼ら運に任せて知る所なり新弄あれ軍卒勇つ何系小延
の三河武志と目前に詠居たりと親忠をまんしと信秀大
割し汝の中を理れけしと之を良將に敬比ありて信に交兵を勤
可憐ると何ぞと後兵を用ひるに孫子の秘法も亦之先今日に
小延して敵の虚実を知り後良討し是と手品をまんしと信
備とより表列位と懸へる所は戦も陣と云因りて之
より討親忠の士卒を在るの夜討をして之を下を修へて打

立如子織田氏陣中より大書りと水車此処より了了織田掃部信
 任と云い地をとり松平源兵衛宗元河合守時中斬し宗元は寸文
 字流せんえきより切られ膝刀を振んとすり陣中へもすり刀
 柄長く押えりて討取んと地をとり若菜沼新八郎定俊即ち子
 代りたり押取ると云ふと組双方争ひ大かきと信任をひかりと
 定俊と云う投交をり首とかんといふ如き中多平八郎地多と
 内甲小島とを河のけ上りり下りりといふ如き定俊大言揚が
 上りり敬そと云より早くも川通下りて首を捲るるを互に
 入交りたれ合戦して石川が多榊原入乱て散る小我も左小織
 田右大夫假易してと云りたり信秀登りて打悪ると約のけを
 川通下りりいさゝか信秀何方へ退んて欲むと榊原が多の

長清の嫡子左衛門信長改は所小事て佳川左小加地と云い敬し故小
 よるへといふと云いれ右信秀退そやも及つたら平小進を
 通はぬといふと退然と信秀討とんと又と云ふと小織田が退信元
 を末推進と云う討とれぬといふと改めりといふいふとさ
 ぬをらいて物せんといふと流心雜兵古士持并信長は進退と云
 尺才の大方引提りていさゝか改めたり腕部のぬりよるを
 障礙とて後悔さると云うと突つたり説ひたり立如子左進を
 馬より突落し信秀此陣を求て退りたり信秀七百死と出り
 一生を保つ旗尾則一進退するは時の新小尾則地を九百
 六拾余人と討とれしと井田のつれなから勝鬨と云ひひ本
 城として陣中あれを是より威風を道と云う志の若しをな

クリクハ然小井田のついで討死の靈魂夜前く泣きけり小聲影を
人の肌骨を寒かしむ依りて骸骨を拾ひ集めて千人悔と
号して一重を建立せし別成道山松安院大樹と名付て
法事を行ひ執りひひりれは是より漸静りぬを後子親忠
ハシカチ老妻小及みの明應六年丁巳七月五日小息正徳三存
長親ハシチ家督お傳して同小名後城に居居たもの昌安此
年と成しより安祥是時与城の主となり敬親と名つもの如く
小氏を傳し懐きつ、従ふ者多かりり

柳原を為作也政の子小平を康政の子を以て康徳とお傳す
中心御をこそと

三河後同去記正説大全卷之二

五五

八八

九九

一〇〇

一〇一

